

〈特別講義〉

場所と記憶

— 「震災」が突きつけた問いを巡って—

佐々木俊三

東北学院大学教養学部地域構想学科

震災から三年余りが経ち、穏やかな秋の日々を迎えている。震災直後のかなり慌ただしかった日々を思い返してみると、あの時には別の時間が流れていたかのように感じる。様々なことが、混乱のまま、一挙に押し寄せたようで、溢れるような時間の流れに押し出されていた。混在したままの種々な脈絡や支流のような脇道の出来事もたくさんあった。だがそれら傍流の出来事も、次第に整理され、ぬかるんだ道が日の光に固められて日常の行き交いがルート化するように、落ち着く所へ収まってきたような印象を受ける。時間を取り、距離を取り、一步退いて顧みると、あの時の出来事が私たちに何を突き刺してきたのか、その痛みの傷の行方を押し量ってみるゆとりが、少しは出てきたようにも思える。いったい、あの時の出来事は、何を思いはかるよう促し、何を思惟の対象として指さしていたのか。

震災はあちこちに破壊の爪痕を残した。車が壊され、家が流され、家の調度も流され、そして家族までもが流された。あちこちに悲しい現実が残った。そして一つ一つの喪失について、部分を重ね、順序を追い、段を踏んで行くように、それらが修復されていった。道路の修復、瓦礫の撤去と掃除、喪失した遺留品の回収と持ち主への帰還、流された家財の修復、避難所の設置と運営、仮設住宅の建設、そしてコミュニティの回復、喪の明けと死者への配慮、日々の生活の建て直し。水道やガスや電気の回復、たくさんの必要で地道な努力が実っていき、痛みの修復はかなりの程度に進んだように見える。

少なくとも被災地から破壊の爪痕は、外面的には消えて行ったように見えた。だが、時間の進み方がまったく違う地域があった。震災から二年後に、見ることの怖れを抱きながら、福島を訪ねた。被災地を南下し、相馬から南相馬へ、南相馬から小高へ車を飛ばした。幹線道路から一步海側へ路を転じると、放置された水田に流された船や車がまだそのまま残る風景が広がる。荒れ果てた水田には、縦横無尽に雑草がはびこっていた。地盤はあちこちで沈下し、海の水が流入し、至る所、手つかずのまま捨て置かれている。かつてこの風景を生きてきた人がこれを見れば、その人の心がどれだけ痛むのか、そのことを思った。

小高から浪江に進んだ。遠い山の端に原発の煙突が見えた。死んだような浪江の街、人っ子一人いない家並のある風景、昔西部劇でしか見たことがないような荒れ果てた街、その街の現在の現実を見た。海へ近づく道を辿り、請戸小学校の残骸を見た。体育館も教室の一階部分も、恐ろしい津波が突き抜けていった爪痕が残されていた。残酷な爪痕、その残骸の小学校とは裏腹に、幸いにもこの小学校の生徒と教員は、緊急避難し、山側へ逃げて全員無事だったそうだ。せめてもの救いだ。あの時の津波を象徴するかのように、小学校の教室の時計がみな、三時三十八分を指していた。時計が停まって、あの時を指し示したままなのは、何か不気味な印象を与える。硬直した時間。映像がその時を指し示して固まったままの時間だ。時計そのものが凝固して、黙したまま、あの日あの時を指差す死者のようだ。《ecce homo》と語るニーチェの言葉のように、《この時を見よ》と死

者が語っていたように見えた。

ここの風景を日常として生きてきた人々の今を思った。難民という言葉が浮かぶ。dislocated people。ニュースでしか知らなかった言葉の現実が、今、ここの目の前に存在していた。地球上に何千万の難民が存在するという。それらの人々は、皆、「場所」を奪われた民だ。「場所」を取り戻すことが困難となった人々、「場所」から追い立てられた人々、「場所」を剥奪された人々。dislocate という語に挿入された locus という語、その locus はラテン語でも locus であり、ギリシャ語の topos に由来する。この語に「離れて、引き離して」を意味する前綴り dis- がついて、dislocate は「他の場所へ移す、置き換える、位置をずらす」などの意味となるが、いずれ「難民」とは「場所」を喪失した民を意味する。対岸の火事ではなかったこの「難民」という現実が、目の前に出現したこと自体驚くべきことであった。

だが同時に、そのことによって、私たちは「場所」というものが持つ意味について改めて問いなおされているという事態に直面した。進んで問わなければならないという能動とは逆に、現実が私たちに問いを仕掛けている、そんな受動的事態である。すなわち「フクシマ」の現実、生に対して「場所」が持つ意味の問いを私たちに突きつけたのだ。「場所」の喪失が衝撃となるのは、言うまでもない、「場所」が私たちの生を構成する重要な契機だったからだ。その契機となったものは出生と育成、それらは「場所」と結びついて経歴される。だとしたら、「場所」の喪失は「生」の喪失に近い。いったい「場所」とは何だったのか。

「場所」を喪失した人々と、「場所」を修復した人々、回復にそれぞれの違いはあっても、一様にすべて、彼らは「喪失」を経験した。「場所」がどれだけ「喪失」と繋がっているのか、そのことを考えてみなければならないと思う。ひょっとしたら、「場所」と「喪失」は本質的な連関を持っているのかもしれない。喪ってしまっただけで取り返しの効かない場所と、喪ったが取り返すことが出来

た場所、そこには確かに違いがあるように思える。だが、場所が場所となる時、それは喪失を迂回することなしには、そうなりえないようにも思える。場所は記憶なしに場所とはなりえないからだ。とすれば、「場所」という概念にはある種の取り返しの効かない喪失が、鏡の裏の裏箔のように、絡み付いているように思える。場所と喪失、喪失と記憶、これらの連関を問わなければならない。

三・一一の現実、その現実が私たちに思考せよと突き刺してくる問い、それを私は、「場所」と「記憶」をめぐる問いとしてあぶり出したいと思う。これらの問題は、絡まった糸のように解きほぐしがたく存在している。それらの糸の絡まった糸だまりを、幾重にも別れる道の分岐点のように見なしてみよう。その幾つかの分岐点が、思考に形を与える。秋の日の穏やかな光が射して、その分岐の場所を柔らかく明るく照らし出す。幾重にも岐れる道の行方を分節させるように、その分岐の場所に足を留め、道草をしてみよう。

Verweilen。束の間、足を留め、滞在することがその意味である。ヘーゲルは、「否定的なもの」の威力を身にまとうために、そこにしばし身を留めることが必要だと語った。その Verweilen である。私がここで身を留める場所は、けっして否定的なものというわけではないが、しかし否定的なものに無関係だというわけでもない。分岐点にしばし滞在し、足を留め、回り道をして道草をすること、それによって何かがぼんやりとは見えてくる。その道草の時間、回り道の時間に、ゆっくりと形をなして見えてくるもの、そうした時の熟すさまを待ち臨みたいと思う。

※

「場所」に人は住み続けてきた。「住む」ことによって、「場所」の匂いや感触が肌に刻まれ、そこに親密さや懐かしさが醸し出された。人は、「場所」に家を「建て」、「住まう」。何もない土地に家を建てるためには、土地の開墾、土地の地ならし、土台作り、組み立てるための柱、こうした素材とそれを繋ぐ工程が必要になってくる。「建て

る」こと、「建て」られたもの、「建物」は、「住む」ことに繋がる。だが、すべての「建物」が「住居」となるとは限らない。「橋」や「道路」も建てられたものだからだ。「橋」や「道路」は「住む」ためのものではない。だが、「橋」や「道路」が「場所」でないということはない。家の近くにある「橋」には、家の場所を場所として構成している何かが参与している。家の前の道路で人々が集い子供が遊んだとすれば、その「道路」も家の場所を構成している何かに参与しているのだ。家に限って言えば、「建てる」ことは「住む」ための手段であり、「住む」ことは「建てる」ことの目的であるように思われる。だが、「建てる」ことと「住む」ことの関係は手段と目的のような単純な関係ではない。手段と目的の連関でとらえると、ある本質的な関係を見逃してしまうこともある。

「建てる」ことと「住む」ことの本質的な関係を尋ねて、ハイデッガーは書いた。彼は戦後の一九五一年に、復帰に関わるある重要な講演を行っている。戦前のナチズムに加担したハイデッガーとは幾分違うスタイルで、まるで転回を経験したかのように、それらの講演を行った。それらが集められ、《Vortraege und Aufsätze》（『講演と論文集』）と題されて公刊されている。それぞれは百頁にも満たない小さなパンフレットの集まりだが、三巻に分けて出版された。各分冊は小さな分冊だが、この小ささは重みのない小ささではない。余白に削られた言葉の重さは、この小ささを凌いで、目に見えない深みに届く言葉のように思える。その中の第二巻に、＜Bauen Wohnen Denken＞（「建てる、住まう、思惟する」）と題された講演が収載されている。一九五一年八月五日、ダルムシュタットで行われた講演である。彼はそこで、「建てること」と「住まうこと」の連関を語った。少し長くなるが、引用してみたい。

「建てることは何を意味するのか。「建てる」という語の古い高地ドイツ語である《buan》は、「住む」ことを意味する。それが述べていることは、「在り続けること」、「滞在する」

ことである。「建てる」bauen がすなわち「住む」wohnen であるという「建てる」という動詞の本来の意味は、私たちには喪われてしまった。その覆い隠された痕跡が、《Nachbar（隣人）》という語に保持されている。隣人とは、《Nachgebur》、《Nachgebauer》であり、近くに住まう人である。動詞の buri, buren, beuren, beuron はすべて、住むこと、住居を意味する。古代語の buan はもちろん、「建てる」bauen が本来「住む」wohnen であるということを私たちに語るのだが、そればかりではない、同時にそれは、名指された「住む」Wohnen をどのように考えねばならないかの示唆を私たちに与える。「住む」Wohnen ことについて語られるとき、私たちが通常思い浮かべることは、その振る舞いは、人間が多く他の振る舞いの仕方と並んで行う一つの振る舞いだということである。私たちはここで働き、そこで住まう。ただ住まうばかりではない。ある職につき、仕事をし、旅行をし、その間に、ある時はここで、別の時はあそこで住むのである。「建てる」bauen という語がまだ根源的な仕方で語っていたところでは、それは、「住む」Wohnen の本質がどの程度まで行き届くのかを述べている。「建てる」bauen, buan, bhū, beo はすなわち、「私はある」ich bin, 「あなたはある」du bist, 命令形で「あれ！」bis, sei という変化形を持つ《ある bin》という語なのである。《私はある ich bin》ということは何を意味するのか。《ある bin》が帰属している「建てる」bauen という古代語がこれに答えている。《私はある ich bin》とか《あなたはある du bist》は、私は住む、あなたは住むということ語っている。あなたが在り、私があるあり方、私たち人間が大地に「存在する」そのあり方は、Buan であり、「住む」Wohnen ことなのである。人間であることは、死すべきものとして大地に存在することを意味し、住まうことを意味する。「建てる」bauen と

いう古代語は、人間が「住まう」限りで「存在する」ことを語る。この「建てる」という語は今や同時に、手入れをする hegen、世話をする pflegen ことを意味し、畑を耕す den Acker bauen、とか、葡萄の世話をする Reben bauen と使われる。このような「建てる」Bauen ことは、自ずからその果実を熟さず成長を、見守ることにすぎない……」。

(Heidegger, M. "Vortraege und Aufsätze" Teil II, Dritte Auflage 1967, Neske, s.21.)

以下 Heidegger, V.u.A., s と記載)

日本語で「建てる」ことは、「立てる」とも書く。また「立つ」ことは、「起つ」ことと同じ語であり、用法によって漢字を使い分けているに過ぎない。おそらく「タツ」という共通の動作があり、これが漢字に使い分けられたのであろう。家を建てることは、柱を立てること、横たわっているものを立てるのは、それを起こすこと、座っていた人が立つのは、身体を起こすことを意味する。これらの共通のある動きこそ、「タツ」という根本の動作に違いない。だがハイデッガーが語るように、「建てる」と「ある」がインド・ヨーロッパ語の系統において語源的に近縁であるという関係は、日本語には存在しない。これに対し、「建てる」という語の現代的な使い方に戻れば、ヨーロッパ語と日本語の用法にそれほどの差異はないとも言える。現代的な感覚からすれば、「建てる」ことは建築することや制作することにつながり、作り上げること、建設すること、構築することに繋がっている。それはもちろんドイツ語にしたところで同じことだからだ。ものを作る、制作する、築く、建設する、構築する、といういわゆる工学的な「建てる」に、もともとの「建てる Bauen」は繋がっている。

だがしかし、ハイデッガーは、この「建てる」という語に隠された古い「根源的な」意味連関を語ろうとする。その連関からすれば「建てる」ことは「住む」ことであり、「住む」ことは「滞在

する」ことであり、「滞在する」ことは「ある」ということである。この「根源的な」意味連関は近現代語の脈絡では隠蔽され、忘却されていった。それと同時に「建てる」は、工学的な意味へと吸収され、「制作する」、「築く」、「構築する」などの意味へと偏好をとげていった。別様の言い方をしてみれば、古代語としての「建てる bauen」は、「住む」ことに繋がる意味連関と、「制作する」ことに繋がる意味連関の、二様の可能性の意味を内包していたのである。そして、「住まう」とか「そこに居続ける」とか「そこに暮らす」「大地に根づく」の意味を内包する連関を語って、ハイデッガーは《Gewohntheit》という語を導いている。いつもそのようにあり、慣れ親しんだものという意味である。「住まう」ことが「滞留する」ことであり、「居続ける」ことであり、「親しみを持ってそこに留まる」ことであるがゆえに、「慣れ親しむ」意味が生じ、そしてその結果「習慣 Gewohnheit」という語に繋がった。「習慣 Gewohnheit」とは、直接的には gewöhnen（「慣れさせる、慣れる」）に由来する語だが、この gewöhnen は「住まうこと wohnen」や「足を留めること verweilen」と関連している。

※

「慣れ親しんだ」ものやことは、生活の中で折り重ねられるようにして反復され、「習俗」となる。習俗をドイツ語で Sitte と言う。ヘーゲルはその言説の中で、「道徳性 Moralität」と区別して「人倫 Sittlichkeit」という語を使った。『精神現象学』の「精神」の章の冒頭に、その記述の場所は位置づけられている。記述の時間的経緯からすれば、「人倫 Sittlichkeit」が記述された後に、「市民社会」が記述され、その後に「道徳性 Moralität」が記述される。記述の順序には、もちろん論理的な推理がある。この「人倫」という日本語の訳語はよくその意味を汲み取ることのできない訳語だが、「Sittlichkeit」が「習俗 Sitte」という語から出来上がっていることを思えば、それが生の「習慣 Gewohnheit」に強く結びついている語であるこ

とは、容易に理解できる。ヘーゲルはこの「人倫 Sittlichkeit」の場所で、「家族」を記述し論じた。「家族」は「習俗」において生きる精神の形態に他ならない。人々は、かつてあり今もそうでありこれからもそうであるような生のあり方を通過しつつ、生きることの「掟」、生きることに形を与えてきた習いや定めに強く繋がって生きているからだ。

ヘーゲルが語る「精神の形態 Gestalt」には、「論理学」で論じられる「概念範疇」が、その記述の論理的骨組みとして対応している。ヘーゲルの『論理学』を構成する大きな分節は、「存在 Sein」「本質 Wesen」「概念 Begriff」のトリアードである。ヘーゲルが『精神現象学』で記述する「人倫 Sittlichkeit」について、その論理的場所は、このトリアードのうちの「本質」に対応するべく位置づけられている。

「本質 Wesen」という語は、ドイツ語では、「存在 Sein」の動詞形である sein の完了形、「あった gewesen sein」と繋がるとヘーゲルは語っていた。だとすれば、「本質 Wesen」のうちで記述される概念範疇は、ある種の過去性を引きずっているということが言えようか。「本質」で記述される概念はすべて「反照・反省 Reflexion」の概念群であり、「本質」の概念範疇はすべてこの「反省規定」であると言える。もっと解りやすく言えば「関係規定」であると言って構わない。「反照」を意味する Reflexion は、もともと光学的な現象を論理的な脈絡へと転位させたものだが、これに対して「反省」を意味する Reflexion は、空間的な関係を時間的な関係へと転位させたものとして使われている。私たちが、「何かを反省する」というときには、私たちの意識が過去へと向かい、この過去の行為を問い返し、これを現在へもたらし、比較し、差異をはかり、顧み、検証している。この意味で、そこには「反省」の照り返しがあり、関係項の同一と差異と矛盾の現象が生起していると言っていいだろう。

ヘーゲルは、この「本質」において、初めて論理学の根本的規定である「同一性」と「差異性」、

そして「矛盾」を論じている。関係規定が論じられるためには、意識が意識の心的内容に立ち帰ってその異同を論じることのできる「内面性」が成立していなければならない。そしてこの内面性の意識は、意識が意識のうちに時間を浸透させることができなければ、不可能であろう。例えば「私」が今二十歳だとしてみよう。二十歳の私が、十五歳の私と同じ私なのか、違った私なのか、その時に発言した私の内容と今思っている私の内容とが矛盾していないのかどうか、こうした問いは、過去と現在との関係を問うており、意識はこのときまさに「関係」となっている。その意味で「本質」の概念範疇がすべて「関係規定」であること、従ってある過去性を引きずっていること、本質 Wesen が存在 Sein の動詞形の完了形である gewesen sein から出来上がっているということは、偶然ではあり得ず、まさに本質的な連関を有していることだと言わねばならない。

「精神」の現象形態の一つである「Sittlichkeit」は、「過去」という時間態と強く結びついており、そうした時間性を具えた「形態 Gestalt」だったとすることができる。ヘーゲルは「Sittlichkeit」を「過ぎ去り行くこと」「通過して行くこと」「移行」の形象として扱った。それは、この「Sittlichkeit」を示す家族がつねにすでに過ぎ去りいく形象として、「喪失」と強く結びつくことを語っているものだ。『精神現象学』で滅多に固有名詞を使わないヘーゲルが、「精神」のこの「Sittlichkeit」の章で「アンチゴヌ」という悲劇的形象に言及している。それは、言うまでもない、「アンチゴヌ」という形象が「家族」というものを代表する形象だからだ。国の掟、ポリスの掟にまで対抗して、アンチゴヌは兄の遺骸を埋葬した。国を守ろうとした兄も、国に弓引こうとした兄も、妹にとってみれば、同じ家族に属すものだ。彼女の行為は、この当たり前の掟に従って、家族として為すべき行為、埋葬に従事したことを示している。だがそれは、同時に、自らの死を招く行為でもあった。アンチゴヌをして埋葬という行為へ走らせたもの、それは、たとえ国の

掟が家族を崩壊させたとしても、それでも家族を守らねばならないという、家族の継続を貫く精神の掟であったと言える。アンチゴースが従った家族の掟とは、アンチゴースが帰属する一つの家族の掟にとどまるものではない。それは、家族一般の掟、あらゆる家族の世代を継続して繋ぐ掟だと言って構わない。家族は、その成員の死や喪失に際会して、彼らを埋葬し、家族へと回収し帰還させ復帰させねばならない。これは、避けられない死に対して家族が行う厳粛な回復の作業なのである。この作業を行うものこそ、女という性である。ヘーゲルは性的差異をそのような形で分節した。家族とは守らねばならない精神の記憶の形象だったことを、男ではない、アンチゴースという女が証したことを、銘記しておこう。

※

ハイデッガーが語る「Wohnen」、彼はその根源的な意味連関を探りつつ、《Gewohnte》という語を導いた。ヘーゲルの《Sittlichkeit》が復元しようのない喪失と結びついているように、ハイデッガーはこの「Wohnen」の意味連関において、ある「決定的なこと」が覆い隠されたと語っている。つまり、人間の存在として経験された「住まう」が、覆い隠され、人間存在の根本特徴として「住まう」が思惟されなくなっていく。これが「決定的なこと」である、と。そしてそれに続けて「住まう」語の根源的意味に立ち帰り、次のように述べるのである。

「古ザクセン語の《wunon》、ゴート語の《wunian》は、bauen という古代語と同様に、存続すること、滞在することを意味する。だがゴート語の《wunian》は、この存続することがどのように経験されるのかをより明確に語る。wunian とは、満足していること、平穏にもたらされ、そのうちに居続けることを意味する。平穏 Friede という語は、捕われない自由 das Freie, das Frye を意味し、そして fry は、障害や脅威から守られてある

こと、……に対して守られること、すなわちいたわられてあること geschont を意味する。自由であること freien は、本来いたわること schonen を意味する。……」

(Heidegger, V.u.A., s23)

ハイデッガーは、「住まう」ことの古代的な意味を掘り起こし、平穏に在り続け、とらわれることなく自由であり、大事にし、いたわることという意味連関を探り出した。そうした「住まう」ことの成立する条件は、何よりも第一に「大地のうえに」住まうことでなければならない。「大地のうえに」住まうことは、同時に「天空の下に」生きることである。「大地のうえに」「天空の下に」住まうことが「生きる」ことの条件であり、人間がこの条件のもとで生きることは、同時に人間が「死すべき存在」であり、限りある存在であることを語っている。限りある存在という自己限定は、同時に「限りなき存在」を前提し、この「限りなき存在」としての「神的なもの」を前に「立てる」。人間はこの条件に貫かれて存在しており、この条件のくびきのもとで、互いに共に暮らし、帰属しあう。ハイデッガーはこのように語ることによって、あの「住まう」ことを構成する四つの次元を顕らかに示した。すなわち、一に大地、二に天空、三に神的なもの、四に死すべきものである。「住まう」とはこのような四者、四つの条件に貫かれて、それらの根源的布置を生きることに他ならない。この四者をハイデッガーは「取り集められた四」を意味する《das Geviert》と命名する。

「住まう」ところ、それは「場所」と呼ばれる。「場所」と呼ばれるのであって「空間」とは呼ばれない。「空間」はある種の均質性を帯びており、「場所」が持つ具体性を交換可能な均質性へと還元することを可能にするものである。「場所」には生活の匂いが結びついているが、「空間」には「場所」が持つ具体性はない。人は「場所」において住まう。「住まう」がこの四つ組の配置や布置や統一を生きることであれば、「場所」もまたそのことと無関係ではあり得ない。自らを限りあるものと見な

す人間が、大地の上でたつきを耕し、障害や脅威から守られ、守られることにおいて神々に感謝を捧げ、互いをいたわりつつ帰属し合う姿こそ、「場所」において展開されることでなければならない。そのように生きられた「場所」に人々は慣れ親しみ、そこに平穏で平安な自由を生きるときに、その「場所」は人々に慣れ親しんだ場所として、眼と耳と鼻と舌と手にそれぞれ固有な味わいを醸して、「思い出」と「記憶」を紡いだに違いない。「場所」とはそうしたものであるはずで、それは断じて抽象的な思考の「空間」に還元されるものではない。

ハイデッガーは「Wohnen」の本質を尋ねて、《das Geviert》の配慮といたわりを語る。《das Geviert》を配慮しいたわる限りにおいて、人間は「住まう」ことの本質においてあり、そこに滞在し、そこで寛ぐのである。その「住まう」場所こそ、固有な意味での「場所」であろう。だがこの固有性は、抽象性へと転位されても行く。それが、場所が空間へと還元されることであり、固有性が抽象性へと通分されることであり、質が量へと転換されることである。彼は言う。

「住まうことは四つの条件を配慮しいたわるが、それは、住まうことがその四つ組の本質をもろもろの事物へもたらすときである。しかしこれら事物自身はあの四つ組を覆い隠すときがある。それは、事物それ自身がそれらの本質にありながら事物として放し置かれるときにのみそうなる。どのようにしてそのことは起こるのか？ 死すべきものたちが作物のような成長する物たちに手を入れ、世話をすることによって。死すべきものたちが、成長することのない物をことさらに建設に用立てることによって。世話をするのと建設することは、狭い意味での「建てること Bauen」となる。「住まう」ということは、それがあの四つの条件を物へと閉じ込め保管する限りで、この保管として一つの「建てる

Bauen」ことである。」

(Heidegger, V.u.A., s25-6)

ハイデッガーの記述は微妙である。住まうことが住まうことに固有なあの四つの条件を配慮しいたわるのは、あの四つの条件をもろもろの事物へと行き渡らせるときである。もしこの条件が忘却され、もろもろの事物がもろもろの事物のままに放し置かれるならば、あの四つ組の覆いと隠蔽が起こる。ハイデッガーはここで、住まうことの固有性を配慮している場所が、置き換えのきく空間の抽象性へと転じる契機を語っているように思える。固有性が抽象性へと転換される契機、その屈折の点を、次のような言葉で表現している。「これら事物自身はあの四つ組を覆い隠すときがある。それは、事物それ自身がそれらの本質にありながら事物として放し置かれるときにのみそうなる」。この四つの条件が覆い隠されるのは、「死すべきもの」が事物の「世話をし」、事物を「建設に用立てる」ときである。これが狭い意味での「建てる」ことであり、言い換えれば工学的な意味での「制作する」に繋がって行くきっかけでもあるのだ。「世話をする」ことは、幾何学的な農業に繋がり、「建設する」ことは、文字通り「建築工学」に繋がる。農業も工業も、それらが技術として工学的な見地において展開される限り、空と大地、死すべきものと神的なものあの条件を忘却し、住まうことがそれらの条件の布置においてのみ可能な死すべきものの有限性を踏み外していく。死すべきものが死すべきものであることを忘却し、「住まう」ことの本質であるあの「四つの次元の配慮」を無視することに結果していくのだ。こうして、「住む」ことに繋がる意味連関を具現していた古代語としての「建てる bauen」が、「制作する」ことに繋がる意味連関へと傾斜し、二様の意味の均衡、バランスが崩れ、一つの意味の偏好へと傾斜していく転換点が、明らかとなる。

※

ハイデッガーはこの記述の後に、第二の問い

「建てること bauen は住まうこと Wohnen にどんな点で帰属するのか」という問いを展開し、これを説明するため、実例としてふたたび「橋」を導入した。「ふたたび」というのは、この講演の前半部分に立てられた問い、「住まうこととは何か」という問いに対して、「建築物」だが「住まい」とはならない実例として「橋」を最初に導入しているからだ。だが第二の問いに対して、「ふたたび」導入された実例としての「橋」は、単なる実例として取り上げられるに過ぎない「橋」ではない。実例という散漫さを越えて、むしろ論題の中心となるべく提示されている実例となる。なぜか。

「橋は《かるやかにそして強靱に leicht und kraftig》流れの上に弧を描く」。

(Heidegger, V.u.A., s26)

一文の中の《かるやかにそして強靱に》という形容語が括弧の中に挿入されているのは、ハイデッガーがこれを誰もが知る引用として強調したいがためである。それは、ヘルダーリンの詩の一句であり、1800年に完成した『ハイデルベルク』という詩の中に置かれている。ハイデッガーがこの「建てること」と「住まうこと」について書いている彼の心裡の情景を誘い出すために、このヘルダーリンの詩『ハイデルベルク』を一部引用しておかねばならない。

ハイデルベルク

すでにひさしく私の愛しているおんみ、おんみをわたしは母とよびたい、そしてつたない歌をささげたい、

祖国のすべての都市のうち

もっとも美しい自然にめぐまれているおんみよ。

山深く棲む鳥が翼を揮って空高く峰々をわたるように、

おんみのほとりをかがやき過ぎる流れを越えて橋はかるやかに、そして強靱に虹をえがく、

その橋は車馬と人とでとどろいている。

神々から送られたようなひとつの驚異（おどろき）が

かつてその橋上にわたしを留（とど）めた、

わたしがそこを過ぎようとして、山々のはずれにかがやく

美しい遠景に目をやったときに。

そして若者 その河流はひたすらに平野をめざしてすすんだ、

悲しくそして喜ばしげに。それは心が おのれの美しさに堪えかねて、

愛しながら没落しようと、

時の潮（うしお）に身を投げ入れるのに似ていた。

おんみはひたすらに急ぐその流れに かずかずの泉と

すずしい樹蔭を贈ったのだ、そして兩岸は

その流れを見送り、波間には

岸べのなつかしい影が揺らいでいた。

.....

(Hoelderlin Saemtliche Werke, Zweiter Band, Stuttgarter Hoelderlin Ausgabe, hrsg. von Friedrich Beissner, s.14. 邦訳 ヘルダーリン全集2、17-18頁、手塚富雄 浅井真男訳、河出書房、1967年)

母としてのハイデルベルクの都市、その都市を流れ、母に対して若者として擬されたネッカル河。ひたすらに急ぐ若者に、かずかずの泉とすずしい樹蔭を贈った母。空高く峰々をわたる鳥のように、日に照り帰る川面の上を越えて、「橋」が二つの土地を繋ぐ。その「橋」の上に立って、神々から送られたような蠱惑する光景としての山々の遠景に、「わたし」は誘われる。「山深く棲む鳥が翼を揮って空高く峰々をわたる」。峯を繋ぐ鳥のように、「橋」は空に渡る虹のごとく弧を描いて、両

岸を繋ぐ。ハイデルベルクの「アルテ・ブリュッケ（古橋）」の光景である。

もっと南のアルプスに近いシュトゥットガルト近郊のラウフェンで生まれ、チュービンゲンで学びを修めたヘルダーリンは、河の流れがおのずとそこへ導くかのように、下流のフランクフルトに青年の時を過ごした。フランクフルトの大きな商家であったゴンタルト家の家庭教師として。そしてそこで彼の生涯を破局へと導くような経験を迎える。平野を目指して進んだ若者。「悲しくそして喜ばしげに。それは心が おのれの美しさに堪えかねて、愛しながら没落しようと、時の潮に身を投げ入れるのに似ていた」。1798年から1800年に至る、千々に引き裂かれた彼の心の軌跡、その記憶も生々しい傷が、これらの言葉に刻まれている。1800年にシュトゥットガルトを訪れたヘルダーリン、彼を迎えた友人たちが彼の病状の重さに驚いている。鬱から狂気へと流れて行く彼の病態の中で、彼はこの詩『ハイデルベルク』を初めとした、成熟したスタイルを持つ作品群を生み出した。

ハイデッガーは、「かろやかに、そして強靱に」建つ「橋」を、ヘルダーリンの詩『ハイデルベルク』を心に描きながら、実例として思い起こしている。それゆえにこそ、第二の問いの解明への実例として描き出された「橋」は、単なる一般的実例としての「橋」ではない。ハイデッガーの記述を裏打ちするかのように、その詩には、あの四つの次元が、「住まう」ことを構成する図柄として、見事にはめ込まれているわけだ。大地を両岸として繋ぎ止める「橋」。その橋の上を鳥が峰々を渡るように、天空を駆け巡る。神々から送られたような魅惑する山並み。そして時の潮に身を投げ入れられる死すべきものとしての若者。平野を目指して河の流れを下った若者を、母なる大地の両岸が、「見送った」。岸辺の懐かしい影が波間に浮かぶ。「愛すべき」「好ましい」(lieblich) 思い出の像である。大地と天空、神的なものとして死すべき者、この四者が、その類い稀な個性を刻みつつ、この詩において「住まう」場所を組み立てている。

ヘルダーリンの詩『ハイデルベルク』を論考の背後に見え隠れするかのように鏤めつつ、ハイデッガーは実例としての「橋」を論じる。それは、種々な実例の一つというには余りにも重く、むしろ論題そのものの地位を奪うような傑出した実例である。まるで「橋」としての「場所 Topos」が論題としての「Topos」「トピック」となるかのように。

「橋は、その橋なりの仕方で、大地と天空、神的なものと死すべきものとを自らの許に取り集める (versammelt)。取り集めることは私たちの言語の古い語からして《thing 物》を意味する。橋は物 ein Ding である、しかもあの四つ組の特徴のある取り集めとして。」

(Heidegger, V.u.A., s27)

「建てる」ことと「住まう」ことの連関を語りつつ、その傑出した事例としての「橋」において、「住まう」場所を構成する四つの次元を取りまとめ、そしてそれらの次元の取り集まりとして、ハイデッガーは《thing, Ding》を言語の深い歴史の中から出現させる。通例《thing, Ding》は、無生物の「物」や「事物」を意味する。しかし、英語の語源辞典を繙けば、thing については、中世英語や古英語において「ある決まった時間に会うこと」の意味があり、そこから「集会」や「公民集会」の意味が生じ、assembly すなわち「集められたもの」を意味することが語られている。また Duden の語源辞典においても、Ding とは「集めること」「集会」の意味を持っていたことが記載されている。これらの古い意味を掘り起こしつつ、ハイデッガーは、「住まう」ことを構成するあの四つ組を「取り集め (versammelt)」、「集める」こと (Versammlung) において固有な「物」の形を成さしめる独自の光景を描き出すのだ。そしてこれこそが「場所」を成立させ、「場所」を「物」とさせると言う。ハイデッガーはこう続けている。

「橋はもちろん固有な仕方をもつ物 ein

Ding *eigener Art* である。なぜならそれは、橋があつた四つ組の一つの場を認める *eine Stätte verstatet* まさにその在り方において、四つ組を取り集めるからである。しかし、それ自身一つの場所 *Ort* であるもののみが、一つの場を認めてあげる *eine Stätte einräumen* ことが出来る。その場所は橋の前にすでに存在していたのではない。なるほど、橋が立つ前には、何かによって置き換えられうる多くの箇所 *Stellen* が河の流れに沿って存在している。それら箇所のうちの一つが場所として明かされるのだが、それもその橋によって *durch die Brücke* そうされるのである。かくして橋は場所に接して初めて立つことになったのではなく、橋そのものから発して初めて場所 *ein Ort* が成立するのである」。

(Heidegger, V.u.A., s28)

他に置き換えることが出来ない場所、その場所はその場所に固有なあの四つの条件を取り集め、これらの四つ組に固有な形を与える。そのとき場所は、あの四つ組の固有な形象として、一つの「物」となる。橋の前に場所があつたのではない。橋が場所を成立させる。「場所」がこのような「橋」とともに成り立つものであれば、「場所」とはまさに私たちの言葉で言う「風光」と重ね合うものであると言えるだろう。「風光」は人の心を動かす景情だが、人に忘れ得ぬ刻印を残してそこに立ち続けるからだ。「風光」はあの「四つ組」と同じように、空と大地、山々と河流、海と海辺、そこに立つ人の住まいと祈りの気配、生者と死者、記憶と時間を闊した風土、これらを取り集め、この取り集めにおいて独特の景情を孕んで、そこにあり続けるからだ。

※

ここに引用したハイデッガーの文章は、「人間と空間」と題されて行われた講演であった。幾何学的な空間、抽象的な空間、ハイデッガーはこの

抽象性が「物」の「物」たる条件を忘却する限りにおいて成立すると考えている。だからこそ、抽象化された空間そのものから、複数のもろもろの空間へ、複数の空間から具体的な「場所」への差異と異同を論じることができるのだ。「場所」は断じて「空間」ではない。私たちは「場所」において事物の許に滞在する。その滞在において、私たちは場所と対象関係に立つのではない。私たちが意識となり、意識から区別された対象としての空間に関わるというのではない。意識と対象の区別は、ここでは事物のもとへの滞在という関係において、解消され還元されているのだ。「建てる」から「住まう」ことへと記述の主題を移した後、彼は「人間」と「空間」の関係を次のように規定する。

「人間と空間について語られるとすれば、このことは次のように聞こえましょう。一方に人間があり他方に空間がある、と。しかし空間は、人間にとっていかなる対抗物でもない。人間とそれ以外の空間が存在するのではない。なぜなら私が<人間>と言ひ、この語でもって人間的な仕方で存在する人、すなわち住まう人を考えるならば、そのとき私は<人間>という名前でもってすでに事物の許でのあの四つ組における滞在を名付けているからだ。また、私たちが手に掴みうる近みにない事物に関わるときも、私たちは事物それ自身の許に滞在するのだ。私たちは遠くにある事物を——人が教えるように——たんに内的に表象し、その結果、遠くにある事物の置き換えとして私たちの内面において、そして頭のなかで、それら事物の表象を歩きたどるというのではない。私たちは今——私たち皆が——ここから出発してハイデルベルクのあの古い橋アルテ・ブリュッケを考えると、そのときあの場所をめがけて思考することは、ここに居合わせる人々におけるたんなる体験ではなく、むしろそれは、あの名指された橋に向かう私たちの思考の本質に帰属し、

そうすることによって、この思考はそれ自身
においてこの場所への遠さに耐え忍び立ち尽
くすのだ」。

(Heidegger, V.u.A., s31)

ハイデッガーは、人間と空間についての、意識の心理学的説明を排除する。人間と、人間の対象としての空間が、意識とその対象として存在するのではない。このような区別に基づき立つとき、遠くにある事物の表象は人間の頭の中のイメージとして存在することになる。事態は断じてそういう仕方では存在していない。たとえ事物が遠くにあったとしても、私たちはその事物の許に、その事物の近くに、その事物に居合わせて、休らうのである。それは、私たちが人間的な仕方では存在する限りにおいて、すなわち「住まう」限りにおいて、なのだ。「住まう」ことは、大地と空と、そして神々と死すべきものと、この四者の布置と配置、配合において、「ある」ことを意味する。そのとき、私たちは、たとえ遠くにある事物であっても、その事物に向かい、その事物へと目がけ、その事物に食い込むのである。ハイデッガーは、ダルムシュタットという場所から、遠くにある事物、ハイデルベルクのあの古橋へと思考を目指す。そのアルテ・ブリュッケは、彼の呼びおこしとともに、講演を聴く人々にも現前し、その現前においてそれぞれに描き出された古橋ばかりではなく、あの詩に描かれた風光をも現出させる。人々は、手の届かない遠さにありながらも、その距たりを超えて、まさにあの事物の許に滞在するのだ。風光を誘い出し、あの事物の許へと滞在することは、かつてハイデルベルクの「橋」に立ち尽くしたヘルダーリンの許へと歩み寄ることでもあり、そして同時にヘルダーリンの喪失に際会することでもある。

ハイデッガーはそのとき、聴衆とともにハイデルベルクのアルテ・ブリュッケに向かった。おそらくそこは、ハイデッガーにとって記憶に刻印せざるを得ない場所だった。彼は、戦前、ハイデルベルク大学の総長となり、そこであの有名な「ドイツ大学の自己主張」という演説を行った。その

ことを忘れないでおこう。廃墟となったドイツから五、六年しか経っていない戦後のダルムシュタットで、ハイデルベルクを慈しむかのように、この講演を行った。彼がハイデルベルクをヘルダーリンとともに思い起こしていることは、あの「ドイツ大学の自己主張」という演説とどんな関係があるのか。あるいは関係がないのか。彼の記憶に留められたハイデルベルクが、なぜヘルダーリンのハイデルベルクであるのか。問題は決して、一筋の糸によって解かれることはありえない。しかしいずれにせよ、ハイデッガーがヘルダーリンのハイデルベルクに思いを寄せ、そこに留まり、そこに場所への配慮といたわりを思い起こしていることは確かだ。そして私たちもまた、ヘルダーリンの「場所」へ、そしてヘルダーリンの喪失へと近づいてみよう。

「死すべきもの」の喪失。「場所」は、それを組み立てている四つの次元のとり形において固有な風景を現出させる。それを他のものに置き換え、他によって代替させ、他のものに還元してしまうことはできない。置き換えのできないこの固有な風景、そこにおいて人間は「住まう」。そしてその「住まう」ことは、喪失によって、置き換えのできない固有な風景となり、セピア色の写真のように、遠くにもありながらも固有な近さと懐かしさを懐胎して、私たちの許へと音連れ、同時に私たちをその場所へ飛翔させ、誘い導くのだ。まるで「物」と際会するかのよう。

※

dislocated people、「難民」。「場所」を奪われた民。もし「場所」がこうした事物への滞在を意味するのだとしたら、そしてそれが人間に固有な「住まう」ことに繋がるのだとしたら。「場所」を奪われるとは、どういう事態を意味するだろうか。人間は大地に繋がって生きている。大地こそ人間の根である。その根を断ち切られた存在、したがって人間的に生きること、すなわち「住まう」ことを奪われた人間。「難民」が自然によって偶然に生み出されたとすれば、その上に生きた大地が奪

われたという意味で、住まう大地を変えることを余儀なくされても仕方ないかもしれない。だがそれでも、土地を変えて仮設住宅や復興住宅に居を変えた人々ですら、生きる根を断ち切られた「喪失」の民であるには違いないのだ。しかしながら、「難民」が人間の作り出した bauen によって、人間の作り出した工学施設によって生み出されたとすれば、それは、暴力や脅威を作り出した人間による人間の「殺戮」という意味を持つはずだ。根源的には二様の意味を持っていた bauen の、工学的な意味への傾斜によって、古代語に豊かに生きてきた「住まう」がこうして忘却された。

ハイデッガーは、bauen が同時に wohnen を意味していた根源的な連関を掘り起こすことを通じて、そこに「乏しき時代の詩人」ヘルダーリンを思い起こした。ハイデッガーにとってヘルダーリンという形象は、彼の後期の思索に置き換えることのできない刻印を与えた。彼はヘルダーリンを思い起こしているというのではない。思い起こすこと以上の、思惟の強烈な陥入と交錯がそこにある。むしろヘルダーリンを掘り起こすために、この bauen と wohnen と denken と dichten の強い結びつきを言挙げしたとまで言えるだろう。

ハイデッガーにとってのヘルダーリンとは、いったい誰なのか。

ヘルダーリンにおける「場所」と「記憶」は、ハイデッガーによって読み取られ吸収されたヘルダーリンの「場所」と「記憶」であるのか。

そのことを改めて問うてみなければならない。そのことのために、固有な風景が重ね書きされるかのように微妙な陰影を残して、あのとき、このときの像を、あのとき、このときの景情を思い起こしてみなければならない。

ヘルダーリンの「橋」。ヘルダーリンの「喪失」。ズゼッテの書簡。ヘルダーリンと交錯したヘーゲルの思い出。ヘーゲルの「記憶」。そしてヘーゲルの「家族」。

ハイデッガーによるヘルダーリン読解を読みなおす作業が続けられている。それは途方もなく困

難な読解であるに違いない。ラクー＝ラバルトがハイデッガーをなぞりつつ、ハイデッガーのヘルダーリン読解から脱却しようと読みなおしたヘルダーリン。

これも、その困難な試みの一つである。だがまた「アメリカのヘルダーリン」の異名をとったポール・ド・マンのヘルダーリン読解もまた、ハイデッガーのヘルダーリン読解とは微妙に異なる道程を示している。そしてド・マンの死後、彼との友情の思い出を語り、喪の不可能性を語ったデリダもまた、ハイデッガーのヘルダーリン読解に絡み、その困難な試みを行っている。

これらの迂路は、震災が切り開いた「場所」と「記憶」の問題と無縁ではない。「場所」と「記憶」についての思考をこれほどに掘り起こした人々に、問い尋ねてみなければならない。震災が切り開いた「場所」の問題は、私たちが忘却し隠蔽してきたある根本的な事態を、暴力的な仕方で顕在化したと言える。「場所」と「記憶」、この問題を震災が突き刺した刺として、問いなおすことが求められていると思う。

(後記。「場所と記憶」と題されたこの文章は、一つの道草、回り道でしかない。問題の周辺、組み立て、構造を語り出すためには、思考のあのとき、このときの風景に足を留めなければならない。この文章はその語り出し、問題提起に過ぎないことを記しておく。)

(2014年10月30日)